概　要　報　告

実施期日	８月１日（木）
部 会 名	小学校　特別活動部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びからの授業改善

テーマ

『伝え合い、認め合う子をめざして　～話合い活動を通して～』

提案概要

本提案は、話合い活動を通じて、児童が伝え合い、認め合う姿を実現することを目指して研究を行ったものである。「合意形成に向けて、どのようにしていけばいいのか」「話合い活動を、子どもたちだけの力で進めるにはどうすれば良いのか」という教師の悩みや「話合い活動の経験が少ない」「自分自身に自信がない」という児童の悩みから、『学級活動における事前、学級会、事後などの一連の活動の中で、自分の思いや考えを伝え合う工夫をすれば、子どもたちが互いに認め合う力を育てることができるであろう。』という研究仮説をたてて研究を進めた。ここでいう「認め合う」とは、「自他のよさや考え方の違いを受け入れようとしている姿」「友達にアドバイスしたり、友達のアドバイスを取り入れたりしようとしている姿」を指し示す。

本研究を進めるにあたって、３つの視点を設定した。３つの視点は、「みんなとともに生きていく力を育てる工夫」「よりよい集団をつくろうとする力を育てる」「なりたい自分に向けてがんばる力を育てる指導の実践」というものだが、これらはそれぞれ人間関係形成、社会参画、自己実現という特別活動における３つの視点とも絡めて設定している。

また同時に、以下の５つの手立てを用いて指導を行った。

【手立て１】ICT を活用した協働的な学び

タブレット端末を活用し、学級会ノートに自分の意見を記入する。そうすることで、友達の意見を事前に確認できるようになり、安心して話合いに臨めるようになる。発言が苦手な児童にとっても、挙手以外での意思表示の手段となることが期待できる。

【手立て２】クラスの全員が納得する合意形成の工夫

学級会における提案理由を明確にして、合意形成を図るためのよりどころとなるようにする。また、話合いが行き詰まった時や、みんなの意見を聴きたい時などに、「３９タイム」という少人数での話合いの機会を設けることで、意見を伝える安心した雰囲気をつくれるようにする。

【手立て３】計画委員会の充実

学級会の具体的な場面を想定しながら、当日のシミュレーションを行い、どんな意見が出そうか、合意形成に向けての障壁は何かについて、教師とともに確認していく。また、前回の計画委員から、成果や課題を引き継ぐことで、児童間のつながりも生まれる。

【手立て４】自分やクラスの成長に気付く、振り返りの工夫

学級会の振り返りに視点をもたせることで、学級会の本質に沿った振り返りができる児

童が増えていった。また、その振り返りもタブレット端末で共有することで、次回の学級会のめあてがより具体化していったという成果もあった。

【手立て５】学級づくりのベースとなる学級目標の設定

クラスの合い言葉である学級目標を作り、常にその目標に立ち返って生活できるようにすることで、学級会中にもそれを大切にする姿勢が多く見られた。

これらの手立てを用いながら、児童や学級会の実態に応じて、指導の工夫を適宜、活用・変化させていった。

質疑応答

Q.特別活動は、「成すことによって学ぶ」という根幹があるが、「成す」にあたる各実践の後には振り返りは行ったのか。また、次につながる様子は見られたか。

A.各実践の後にも、学級会と同様にそれぞれの視点を持たせて振り返りを行った。また、その振り返りを学級に掲示することにより、次の実践に生かす児童の姿も見られた。

Q.学級会の終末における教師の助言には、どのような声かけを行ったのか。

A.児童がもてるように促した振り返りの視点に基づいて、教師も終末の助言を行った。

Q.学級会における事前、事後の指導時間の捻出に何か工夫はあるか。

A.正直、時間の捻出は難しい。高学年になると、休み時間も委員会活動に時間をとられてしまうことが多い現状である。だからこそ、限られた休み時間でも、児童が「やりたい」と自発的に思える活動にしたり、指導に工夫を加えたりすることが重要だと思う。

協議の柱及び協議概要

柱「PMI シートにもとづいた、合意形成に向けての成果と悩み、それに伴うアイデア」

・「合意形成の経験を児童に積ませたい」とは思うが、そのためには提案理由に立ち返ったり、それを明確にしたりすることが大切である。だからこそ、学級会そのものの場数を踏む積み重ねが大切だと再度実感することができた。

・学級会においては、児童が話合いの中心であることに気づかせることが大切である。そのためにも、提案理由を、児童が自分事として考えられる明確なものにできるように、教師としても支援していきたい。

・児童の力だけで学級会を進められるようにするために、４５分という時間の配分の仕方や議題の投げかけ方、用いる言葉の選択などに、事前に計画委員会を中心に教師が支援・指導できるようにしていくことが大切だと感じた。

まとめ概要

タブレット端末や少人数での話合いの場の活用などが、学級会において児童に安心感をもたせる一助になった。だが、「この手立てを行えばいい」というものではなく、児童や学級の実態に応じて、どの手立てや視点が有効なのかを見極めて、的確な指導・支援をしていくことが教師の役割である。合意形成や話合いの経験を、学級会のみで積み重ねるのではなく、他教科や行事とも関連付けて指導がしていけると、よりよい児童の姿につながるのではないだろうか。